

ふるさと奥尻通信

平成25年8月30日
奥尻町教育委員会発行
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭語

夏の暑さも彼岸まで、というけれど、たしかに北海道ではその通り。けれど、「島はもっと涼しいと思っていたのに…」とは観光のお客さん。ふむふむ、これは温暖化か？南国の島になりつつある？

特集 奥尻鉱山関係の新史料

奥尻鉱山の概要については本紙第23号、第41号を参照してください。

最近、奥尻島にあった硫黄鉱山の史料がたくさん手に入りました。なかでも、奥尻鉱山を発見し、経営に乗り出した早瀬家の詳細と、ごくごく短期間で閉じた勝潤(かつま、かぢま)鉱山の写真を手に入れたことは、奥尻鉱山史解明にとって、重要史料となりました。

奥尻鉱山開発者である早瀬家については、大正9年の時点ですでに経営権を譲渡し、離島しており、島内ではほとんど詳細を知り得ない現状でした。偶然にも子孫の方(早瀬忠作の孫:鑛一さん)と巡り会い、早瀬家の肖像を提供していただきました。今回、島内ではおそらく初公開となります。

奥尻鉱山は、明治41年11月20日に早瀬家の長男忠太郎と三男常治が鉱床を発見し、翌年に採掘権を得、同44年1月より掘削を開始しています。『奥尻町史』には、次男忠作が忠太郎と常治との協力によって実地踏査を行ったと記されていますので、この3名が鉱山開発のきっかけをつくった兄弟達と言えます。

大正9年に上京した早瀬家は、早瀬株式会社を興し、製材の調達や回漕業を始めますが、思うようにいかなかったようです。



勝潤鉱山の採掘現場



勝潤鉱山の開山

次に勝潤鉱山の史料についてです。奥尻の鉱山は、幌内の「奥尻鉱山」以外にも、中小の鉱山が林立していました。鉱脈を探して転々とする鉱山経営の正確上、小規模なものは記録に残りにくいものです。勝潤鉱山も、大正7年~同15年の記録が残るものの、同7年こそ1408.7斤の産出量があったとされていますが、8年~15年はすでに休業となっています。稼動したのは実質1年のみという短命であったようです。これ以外に資料は残っておらず、詳細不明の鉱山の一つでした。

この度、宮城県在住の菊池さんより、祖父である菊池嘉助(明治18年生)が、奥尻で鉱山技師として働いていた頃の古写真が寄贈されました。いずれも、開山して間もなくの頃を撮影したもので、経営者ら主立った面々が写っているものと思われます。



後列左:三男常治、右:次男忠作
前列左:母トラエ、右:長男忠太郎



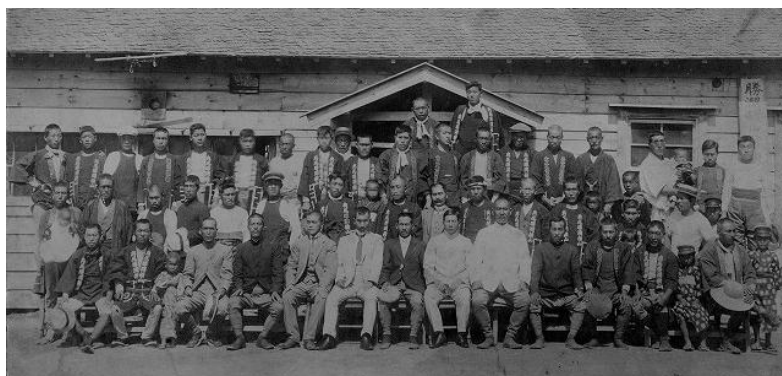
長男:忠太郎



次男:忠作



奥尻鉱山を撮した絵葉書(明治末)



勝潤鉱山合資会社一同

